

心理学研究方法論をめぐる省察 —— 特定諸方法への偏見を克服し、統合化に向う道 ——

吉田章宏*

はじめに

これまで、心理学の多様性とその統合化への道を考察してきた（吉田章宏, 2002, 2003a, 2003b, 2004, 2005, 2006）。本稿では、その継続として、これまでとは少し視点を変えて、心理学研究における研究方法そのものに対する偏見とその克服への道を考察してみたい。ここで言う「偏見」とは、ある意味では、総ての心理学研究者がもっているもので、諸方法の価値付けとして、重視と軽視の両方向で、現れる。それは、ある特定の方法を偏重する、唯一視する、絶対視する、あるいは偏愛する、などという仕方で現れることもあれば、他の特定の方法を、軽視する蔑視するあるいは全く無視する、などという仕方で現れることもある。例えば、内観主義心理学者は「内観」を偏愛し、行動主義心理学者は、恐らく、実験に伴う「行動」観察を、少なくとも、偏重する。ここで、問題は、当事者たちは、それを、「偏見」とは意識せず、それこそが研究方法に対する「正当」な見方である、とすることを自明視し、当然視するということである。そして、まさにその点にこそ、「偏見」が顕著に現れる、というのが、本稿のいわば精神である。

本論に入るまえに、本稿で到達することになる洞察を、先取りして、一般的命題の形で予め簡潔に述べておくことにする。

- 1) 人間は、心理学として、時代、社会、文化によって、また、学派、集団あるいは個人によって、多種多様な心理学的研究を実現してきた。その多種多様性の一つに、例えば、これまで検討してきた、一人称、二人称、三人称の心理学が在る。
- 2) それらのさまざまな心理学的研究は、あるいは、それを営む研究者たちは、存在する/存在しうる個々の研究方法についても、異なる意味づけをし、その意味づけに基づいた「偏見」を抱いている。その「偏見」は、個々の研究方法への、偏重、偏愛、溺愛、絶対視、相対視、軽視、蔑視、憎悪、無視、禁忌、過敏、盲目などとなって現れる。

* 淑徳大学総合福祉学部教授

- 3) その「偏見」に基づいて、異なる心理学と異なる研究方法の価値を信じる心理学研究者の間には、公然とした、暗黙の、あるいは、内密の、相互蔑視の風潮が発生する。そうした相互蔑視の風潮は、心理学全体の統合化にとり大きな障害となっている。
- 4) 仮に、多種多様な心理学の一つ一つが、それぞれが束縛されている「偏見」からそれぞれに解放されて、多種多様な個々の研究方法を多視点的に再評価して、それぞれにおいて、可能な限り多種多様な諸方法を採用するようになれば、心理学研究全体としては、全体的統合化への条件設定が整うと想像される。
- 5) 「総ての方法が、どの心理学にとっても、適切な方法となる可能性がある」と考えるならば、全体的統合化へ条件設定が整うと想像される。
- 6) そこで、想像される事態からは、いま、我々の眼前に展開している混沌とした心理学の無秩序と無政府状態が克服されて、次第に、そして、自ずから、統合的心理学に到る道への契機が生まれてくるであろう。
- 7) そのような事態が起こるため、また、起こすためには、考えておくべきことが、多々ある。その根本には、研究方法についての「偏見」の、反省を通しての、絶えざる相対化とその克服がある。そのためには、「偏見」そのものへの理解が求められる。個々の研究方法の多種多様な心理学の立場からの多面的な評価、研究方法を評価する多種多様な心理学研究者の歴史、社会、文化、多種多様な研究者の信念とその変容の可能性、などへの洞察が求められる。ここでは、そうした洞察に向けての省察を試みる。

I. ある私的体験の「思い出」

今でも、時折、ふと思い出す或る出来事がある。あれは、確か、1964年秋のことだった。米国イリノイ州立大学大学院の心理学研究科で、ブルーナー J. S. Bruner (1962) の「思考の研究」(*A Study of Thinking*) を採り上げた講義形式の授業が行われていた。そのコースの表題は、確か、“Higher psychological processes” (高次心理過程、感覚や知覚過程に対比される思考過程を、内容とするもの) だった、と記憶している。比較的大きな教室で、受講生は百人ほどだった。私は、満席の教室の中ほどで、向かって左側の窓際の席に座っていた。さて、その授業で、最前列に近い真ん中辺りに座っていた一人のアメリカ人大学院生が立ち上がって、授業者である教授に、大声で、素朴に次のように質問したのである。「なぜ、被験者に何を考えていたかを、直接に、尋ねないのですか?」。周知のごとく、当時の Bruner の「思考の研究」では、被験者が、例えば、ある概念の事例となる多特性のカードを、多数のカードの中から、ある戦略を形成しつつ選択 (selection) したり、あるいは、提示される特定のカードが事例と成るか成らぬかの情報を受容 (reception) したり、という被験者行動の「客観的」データが、研究資料として公認され、概念形成過程の研究に用いられていた。が、被

験者に直接「何を考えていたかを尋ねて」聞き出そうとすることは、心理学研究方法として、「厳禁」されていたのである。その学生は、恐らく大学院への新生であったのだろう、と思われる。というのは、この学生の問いに、教室を満たしていた大学院生たちが、若々しいいかにも秀才らしいハンサムなD教授とともに、直ちに大爆笑したからだった。しかし、それは、私にとっては、あまり愉快的笑いではなかった。新人の無知に対する先輩たちの嘲笑といった趣が多少とも感じられたからである。教授の答えは、内観は信頼がおけず、今日の現代心理学では用いられていないこと、内観は時代遅れであること、被験者の説明で思考過程がわかる位なら、厳密で複雑な実験は要らなくなるだろう、被験者の報告を聞かないで、彼が考えていたことが明らかになるところが、この思考過程研究の素晴らしいところなのだ。その大学院生の実に素朴で率直な問いに、その素朴さと無知への多少の哀れみを伴った雰囲気、そのように、常識的な新生への、改めての説明として、丁寧に解説がなされた。これは、他の院生達には既に「自明な事柄」とされているのだが、というニュアンスを含んだ答えぶりであったように感じた。しかし、結果的には、その疑問の本質的な論点は、一笑に付された、といってもよかった。このD教授の返答は、これまでの私の論考の脈絡に合わせて言い換えるならば、「誰彼心理学」は、被験者をあくまで「誰彼」として「客観的に」扱わなくてはならぬ、「我」と同等の一人の人間である「汝」として扱ってはならぬ、というものであった、とも表現できよう。

1964年当時は、ワトソン流の行動主義心理学が漸く衰退に向かい、Hull, Skinner, Mowrer, Osgoodなどの「新行動主義心理学」が華々しく、「新しい心理学」として登場し、隆盛を極めていた時代であった。アメリカ心理学を代表するHarvard大学のJerome S. Bruner教授による「思考の研究」も、行動主義の洗礼のあとに生まれた研究者たちの「客観性」尊重の慎重さを背景に、さらに新しい立場から、厳密で科学的なアプローチによって、行動主義時代であれば研究主題としてはタブーとさえされていた「思考」などという、遠い昔に捨て去られていたはずの主題を、堂々と研究主題にして最先端をきって、その「科学的研究」に挑戦している花形研究とみなされていたのである。いや、それが、私が当時受けた印象だった。

私は、その当時、ソヴィエト心理学の理論的指導者ルビンシュティンの理論的研究（主著『存在と意識』や『心理学』（『心理学発展の道』）、友人達と共に翻訳中であった大著『一般心理学の基礎』そして、実験的研究（『思考心理学』など）にも、既に親しんでいた。そのため、質問したその大学院生の素朴な率直さに共感するとともに、当時の米国心理学における「新行動主義」的な雰囲気の圧倒的な支配下において、心からの納得は行かないままに、恥かしそうにしていると感じられたその大学院生の様子に、私は、共感と同情を禁じえなかったのだった。そして、冷戦下にあった当時のアメリカ心理学とソ連心理学の著しい違いを痛感したのだった。

授業中、その場で直ちに、その素朴な院生の擁護論を展開できるほどには、私は、英語も思いのままにはならなかった。それに、多少とも、新行動主義の圧倒的に支配的な雰囲気なかで、英語の流暢さに欠けている外国人留学生の一人に過ぎなかった私は、「シェークスピア俳優のような」と後に日本の友人への手紙に書いたD教授の爽やかな弁舌に、多少とも、気後れしてもいたのだとも思う。授業後、私は、D教授に近づき、被験者に内観報告を求めるのではなくて、——これについては、既に、授業中の教授の立場は明瞭であったので、敢えて尋ねるまでもなかった、——実験中に同時に平行して被験者に行わせる“Thinking aloud”“Laut Denken (独)”(考えていることを、そのままに、声に出しながら進める方法)を採用することについては、どうお考えになるだろうか、と質問した。当時、日本では広く知られていたDunckerの仕事(1935)を思い浮かべてのことだった。D教授は、明らかに東洋からの留学生とわかるはずのたどたどしい英語で質問する若い大学院生の私にたいして、余裕をもって笑顔で対応しながら、もっぱら被験者の観察可能な「行動」から、その心理過程を明らかにすることが大事なのだ、と答えて、私の質問には、柔らかく、否定的な答えをなされたのだった。

さて、いまや、私の印象に残るあの出来事から40数年が経った。そして、その後の認知心理学と臨床心理学の展開と発展を経ている現在、仮にもし、全く同じ質問が大学院の教室で出されたとしたら、その場のD教授は、そして、多くの大学院生たちは、どう答えるだろうか。今日の私は、それを考えずには居られない。そして、心理学という学問における、内容と方法の、時代の流れに伴う激しい変遷を思わずにはいられないのである。

II. 「思い出」の意味と構造の解明

ここで、上記の「思い出」を採り上げたのは、私にとってそれが、ある懐かしさを伴う、忘れがたい思い出であるからであることは、もちろんである。しかし、それだけが理由ではない。この出来事には、心理学における研究方法の多くの問題が含意されている、と現在の私には、思われるからである。その含意されていると思われる多くの問題の意味と構造を、纏れた糸を解きほぐすように、解明してみることを、以下に、試みてみたい。

- 1) 時代の偏見: 心理学研究における研究方法には、時代による「偏見」、その方法への偏愛・偏重あるいは偏った軽視(偏軽)・蔑視・無視がある。
- 2) 社会の偏見: 「偏見」は、時代だけでなく、社会によるものもある。
- 3) 文化の偏見: 「偏見」は、時代だけでなく、文化によるものもある。
- 4) 学派の偏見: 「偏見」は、時代・社会・文化だけでなく、学派によるものもある。
- 5) 集団の偏見: 「偏見」は、集団によるものもある。
- 6) 個人の偏見: 「偏見」は、個人によるものもある。

- 7) **可能性への偏見**:「偏見」は、特定の方法が、研究者に何をもたらすことができるか、ということについての、偏見である。
- 8) **偏見による社会的禁忌 (タブー)**:「偏見」は、社会的タブーの形をとることもある。行動主義心理学時代の「偏見」では、「内観報告」はタブー (禁忌) であった。
- 9) **PSCの無自覚**:「偏見」は、その偏見が力を持っている「時代、社会、文化、学派、集団、個人」においては、「偏見」とは考えられていない。つまり、偏見は、偏見としては、意識されない。以下では、「時代、社会、文化、学派、集団、個人」を表現するのに、PSCという略号を用いる。PSCには、“Period, Society, Culture, School, Collective, Person”を、(and/or)を含意させる。
- 10) **他のPSCの偏見認知**:「偏見」は、その「偏見」が力を持つ軸となる「時代、社会、文化、学派、集団、個人」(PSC)とは別のPSCにおいては、「偏見」として意識されることがある (例えば、ルビンスシュテインの新行動主義批判も一例)。
- 11) **PSC変化による自覚の発生**:つまり、PSCが変化し変容すれば、「偏見」は自覚され、克服されうる。
- 12) **偏見自覚後の克服肯定**:ある「偏見」が「偏見」として自覚され克服された場合には、その「偏見」は克服されることが望ましかったのだ、と自覚されることになる。
- 13) **偏見自覚前の無自覚**:しかし、「偏見」が、自覚される以前には、克服されなければならない「偏見」であるとは、全く、考えられていないのが、通例であろう。
- 14) **偏見の無尽性**:しかし、一つの「偏見」が克服されても、また、別の「偏見」が、やはり、そのPSCにおいては「偏見」としては認められないままに、つまり、「偏見」として自覚されないままに、その時点では、力をもつことがある。
- 15) **PSC変化による偏見克服可能性**:ということは、方法に関する「偏見」は、PSCを変化・変容させると、克服されうる、ということにもなる。
- 16) **PSC変化の困難性**:しかし、現実には、PSCを変化・変容させることは、決して、容易ではない。
- 17) **偏見と方法採用の相対的独立の可能性**:「『偏見』である」と、あるPSCが考えようと考えまいと、ある特定方法を、その「偏見」にもかかわらず、PSCが、採用することは、可能であろう。
- 18) **方法独立採用への否定的評価**:しかし、そのように採用することは、「偏見」の真っ只中にあるPSCには、「無駄、無益、間違い、…」と見なされるかもしれない。
- 19) **PSC変化による方法採用の評価逆転**:しかし、元々の「偏見」により「無駄、無益、間違い…」と見なされたその採用は、PSCの変化・変容によって、その元々の「偏見」が克服され、別の第二の「偏見」が力をもつに至った場合には、その第二の「偏見」により、「無駄、

無益、間違い、…」ではなかったと、あるいはさらに積極的に、「有効、有益、正しい、…」と、見なされる可能性が生じて来ることになる。

20) **PSC変化による偏見変化と方法評価逆転の可能性:** 以上をまとめると、PSCによる「偏見」により、特定の諸方法に研究方法を限定することには、後に、別のPSCに変化・変容した場合、そこでの別の「偏見」により、「無駄、無益、間違い、…」とされる事態が生じる可能性があるし、その逆の可能性、つまり、第一の「偏見」のもとでは、「無駄、無益、間違い、…」とされていた方法の採用が、第二の「偏見」のもとでは、「有効、有益、正しい、…」とされる事態もある、ということになる。

21) **PSC偏見独立方法採用の耐久性:** そこで、特定の偏見の元に在りながら、それを「偏見」とは認めないという事態に在るPSCは、別のPSCに在りと認める「偏見」を、諸方法の採用において、活用して、その別のPSCの偏見によって採用される諸方法を採用しておけば、将来のPSCの変化・変容による偏見の「変化」にも耐える、全体として、安定した諸方法の組織を採用をしたことに、結果的に、なる可能性が認められる。これは、W. Ross Ashby (1954) の言う、ある適応的システムの適応の安定性に関する、“Ultrastability” の思想に通じる考え方である。

22) **偏見独立採用の一時的否定性:** しかし、その時点では、そのような採用は、当然のように、また、自明のように、「無駄、無益、間違い、…」とされるかもしれない。

23) **偏見からの独立の全体的安定性:** しかし、以上のような論理を、仮に、受け入れるPSCが生まれたとすると、そのPSCには、自らの変容によっても、ある一定の程度ではあろうが、総てを覆されるということのない、つまり、第一のPSCにおいても、第二のPSCにおいても、「無駄、無益、間違い、…」だけではない、諸方法の採用をし続けることが可能となる。

24) **偏見からの独立による心理学統合化の可能性の発生:** 多種多様な心理学の並存という今日の状況においては、PSC相互の「偏見」を克服するには、自らの「偏見」においては否定的価値しかない諸方法でも、別のPSCにおいては肯定的価値があるとされている諸方法であれば、上記の論理によって、採用しておくことは、結果として、多種多様な心理学の、将来の統合への道を開くことになり得る。

25) **共通方法採用による比較とPSC間他者理解:** それぞれのPSCにおいて採用された諸方法が共通する場合には、結果として、その共通する諸方法による研究結果の、異なるPSC相互間での比較を可能とするであろう。それは、PSC相互の「他者理解」を促すことになるであろう。

26) **歴史時代間の他者理解:** 以上は、PSCのうち、例えば、歴史時代 (Period) に関して言えば、他時代への「他者理解」となる。これは、ガダマーの思想に通じる。

27) **異社会間相互理解:** PSCのうち、例えば、社会 (S) に関して言えば、異社会間相互理

解ともなる。ひいては、異社会間相互移行へと繋がる可能性が生まれる。

28) **異文化間相互理解**: PSCのうち、例えば、文化 (C) に関して言えば、異文化間相互理解ともなる。ひいては、異文化間相互移行へと繋がる可能性が生まれる。

29) **異学派間相互理解**: PSCのうち、例えば、学派 (S) に関して言えば、異学派間相互理解ともなる。ひいては、異学派間相互融合さらには統合へと繋がる可能性が生まれる。(Berlyne教授のJ. Piaget研究を想起した。新行動主義の教授は、1972年の東京で開催されたICPに来日、その時点で既に、Vygotskyの『芸術心理学』をロシア語で読破した、と語っていた。)

30) **異集団間相互理解**: PSCのうち、集団 (C) に関して言えば、異集団間理解ともなる。ひいては、異集団間の「小異を捨てて大同に就く」に繋がる可能性も。

31) **個人間相互理解**: PSCのうち、個人 (P) に関して言えば、個人間相互理解ともなる。ひいては、相互蔑視から相互理解を経て、相互尊重へ発展の可能性も生まれうる。

32) **偏見の克服とPSC相互理解の深化発展の道**: 心理学の研究手法の採用に関して、PSCのあらゆるレベルで、たとえささやかでも、それぞれの「偏見」の緩和が起こり、研究方法上の「相互乗り入れ」が始まれば、それは、次第に、異なるPSC間の相互理解の醸成、発生、促進、深化、…という発展の可能性を開いて行くことになるであろう。

33) **信念と偏見の相互転化可能性へ心の解放**: そのための、前提は、それぞれのPSCが、自らの信念を、信念として維持しながらも、あるいは「偏見」であるということが後になって判明することになるかもしれないという将来における可能性にも心を開き、同時に、他者の信念を、その時点では、「偏見」であると仮に信じていたとしても、あるいは、PSCが変化あるいは変容することによって、その「偏見」が、自らのPSCの信念に転化するかもしれない、という可能性にも心を開いておくことである。

以上は、現象学で言うところの、「判断停止」(Epoche)、「括弧入れ」(Bracketing)、「現象学的還元」(Phenomenological Reduction)にも、通じる考え方である。

34) **「偏見」信念固執の代償の危険性**: かりに、自らの信念が「偏見」であるという可能性を全く認めず、「絶対的に正しい」とするPSCが在ったとしよう。すると、そのPSCは、別のPSCにおいて、自らの信念が全くの「偏見」であったとされてしまう可能性、その可能性の危険性に対して、結果として、無防備であることに賭けていることになる。そのことを自覚せずして、その危険に無防備のままに身を曝すのは、身を滅ぼす道への無謀かつ無知な猪突猛進というものであろう。しかし、その事例は、身近にも多数ある。そして、歴史上は、恐らく、そのような事例は数えるに暇がない程であろう。

35) **無駄、無益、失敗、滅亡した諸方法の知の重要性**: 一つのPSCから見て「無駄、無益、失敗、滅亡した…」と見なされている諸方法についての知は、それらの諸方法が、それぞれ

のPSCの「偏見」によって、そのように見なされているという限りにおいて、PSCが変化すれば、そのように見なされなくなる可能性がある。そういう可能性が残されている限り、それらの諸方法の知には、その「偏見」にもかかわらず、積極的な価値が在る可能性がある。さらに、それらの諸方法をそのように見なしたのが「偏見」であり、その偏見に基づく判断であったという限りにおいて、新たな再評価の可能性が常に残されており、別の「偏見」によって、新しい積極的な価値が見出される可能性も、また残されている。

36) 心理学の人称性の自覚は、偏見克服への一つの道である。

37) 「偏見」克服は、心理学統合化への一つの道である。

「思い出」に含意されている解明されうる意味は、これらで総てが尽くされた、というわけではない。しかし、とりあえず、ここまで留めて、それぞれの意味に即して、具体的な事例を挙げて、その意味の解明をさらに進めよう。

Ⅲ. 解明に即した諸事例: 思いつくままに

ここで、最初に、「偏見」(prejudice)という言葉について、注釈して置く必要を感じる。既に本稿の冒頭に述べたように、「ここで言う『偏見』とは、ある意味では、総ての心理学研究者がもっているもので、諸方法の重視と軽視の両方向で現れる。ある特定の方法を偏重する、唯一視する、絶対視する、あるいは偏愛するという仕方で現れることもあれば、他の特定の方法を、軽視するあるいは全く無視するという仕方で現れることもある。」それは、別の表現をすれば、「自明性」(self-evidence), 「(言うまでも無く) 当然とされること」(taken-for-grantedness), でもある。たとえば、前掲の「思い出」において、D教授にも、また、心理学専攻の大学生の大多数にとっても、当時は、思考の実験の被験者に対して、直接に、「この時は、何を考えていたのですか」と尋ねることはしてはならないし、そのようなことをしては、心理学においては、まともな「科学的研究」と見なされないのだ、ということが、「自明であり」、余りにも「当然である」と思われていた。そして、そのように、その時点において、「自明である」、「当然である」と考えるのが、まさに「偏見」だったのである。その意味で、偏見は、「総ての心理学研究者」がもっているのである。Blakenburg, が、その著『自明性の崩壊』(1978)で主題とした「自明性」は、ここで言う「偏見」である。また、Schutz, A. (1973)が詳細に論じている「当然であるとされていること」(“taken-for-grantedness”)も「偏見」の別表現である。ここで、何故「偏見」という言葉を用いるか、と問うならば、それは、「思い出」の場合のように、その時点でのある場において「自明」とされていた「特定の方法に対する重視と軽視」が、より広い立場、あるいは、別の立場に立てば、「偏見」であったということになる、という先の事態を見越し先取りした立場で、問

題全体を捉えようとしているからである。ここで、「偏見」の善悪については直接には問題としていない。以上のお断りをした上で、「思い出」に触れつつ、さらなる解明に進むことにしよう。

1) **時代の偏見**: 1964年という時代の米国心理学を考えてみれば、1910年代から30年間続いたとされるワトソンの行動主義の支配を脱して、行動主義時代であれば研究主題として採り上げることすら躊躇われたはずの「思考」を研究主題としたことに新しい時代の幕開けを感じさせたという状況のもとで、被験者の言葉は信頼されうるデータとしては採用しないという常識がBrunerのハーバード大学のみならず、イリノイ大学でも、広く通用していたということである。これが、仮に、J. B. Watson出現以前、行動主義出現以前のWundt直伝の内観心理学が、コーネル大学に拠点を置いたTitchenerの隠然たる勢力のもとで、米国心理学を支配していた当時であれば、被験者の言葉を信頼せず無視するなどという常識が通用したはずは無かったのである。さらに、しかし、1964年の時点においては、行動主義と新行動主義の時代を経て来ているために、「思考」を採り上げても、研究方法としては、行動観察記録に基づいて推論することが「客観的」で「科学的」であるとの常識が通用していて疑われることはなかった。そこにも、時代の「偏見」が顕著に表れている。1972年に東京で開かれた国際心理学会での「人間思考における心像の役割」という主題のシンポジウムでも、ニュージーランドのPeter McKeller教授は「行動主義の暗黒時代からの」解放という表現を用いて、当該シンポジウム開催への共感と賛意を表明されたことが、私の記憶には鮮明である。このように、時代が変われば、研究主題と研究方法についての「常識」が変化する。そして、前時代の「常識」が後時代の「常識」から見れば、「偏見」として映るときが来るのである。さらに、認知心理学隆盛の今日であれば、恐らく、ブルーナーと同じ研究目的で実験を行うとしたら、研究者は、何の躊躇も無く、被験者のいわゆる「内観報告」あるいは「言語報告」を正当な資料として採用することであろう。その意味でも、1964年と2006年との間では、同様に、時代による「偏見」とみなされうる「常識」には、さらに変化が起こっているのである。今日の米国心理学は、1964年当時の「偏見」からは、解放されている、言えるであろう。しかし、今日の時代特有の「偏見」もまた、1964年当時と同様に多くの人びとに気づかれない仕方で、強力に働いているに違いない。それぞれの歴史時代には、その時代特有の歴史的「偏見」が見られる。なお、当時は、一人称心理学など、問題にも話題にもならなかった。これも、私の眼から見れば、盲点としての、あるいは、無視としての、「偏見」である。この偏見は、一部では、今日でも、未だに根強い、と言ってよいであろう。

2) **社会の偏見**: 米国社会での状況が以上のようにであったとしても、世界中どこでもそうだったわけではない。当時の米国と冷戦下にあったソビエトでは、前述したとおり、ソビエト心理学の理論的指導者であったS. L. ルビンシュティンは、既にその主著『一般心理学の

基礎』において、行動主義心理学と内観主義心理学とが一見対立する立場であるように見えながら、その本質においては、デカルト主義の二元論に基づく兄弟関係にあることを指摘して、弁証法的唯物論の立場からの、両者の「偏見」の克服を訴えていた。その著『心理学』での、心理学研究法としての「内観法」についての理論的検討を踏まえて、その『思考心理学』の研究においては、被験者の“Laut Denken”を積極的に活かして、独自の研究を展開していた。これは、ブルーナーの「偏見」とは異なり、異なる「自明性」「常識」という意味で「偏見」と呼ぶならば、ルビンシュテインの「偏見」であろう。しかし、冷戦下における敵国にも等しいソビエトの研究は、ロシア語を読む心理学研究者は稀であるという無知に伴う障害もあって、米国ではほとんど無視されていた。冷戦下の仮想敵国の研究状況についての情報を得るといふ目的のためか、ソビエト心理学の現況を知らせる大著の米国国務省を通じて翻訳が、mimeographで、出版されるというような有り様であった。英文雑誌Soviet Psychologyも、特別な研究者たちしか目を向けられない少数出版の高価な出版物であった。しかし、ロシア語を読まない日本の研究者にも、ソビエト心理学の研究状況は、当時の東ドイツでの独訳を通して、あるいは、イギリスの研究者たち（たとえば、Brian Simon (1957), N. O'Connor (1961), など) による英訳の努力を通して、細々と知られているという状況があった。そうした状況のもとにある日本の研究者には、幸か不幸か、米国の「偏見」とソビエトの「偏見」とを比較して、その両者を共に知ることに出来る状況にあった、とも言える。社会間の交流が乏しいときには、それぞれの社会の「偏見」が相互に知られることなく、「偏見」は、それぞれの社会における「確信」として通用することになる、という一つの事例とも言えようか。ちなみに、ヴィゴツキーの『思考と言語』全訳が、畏友・柴田義松氏の翻訳によって日本で上下2巻として出版されたのが、1962年である。その極く一部の抄訳が米国のMITPressから、J. S. Bruner教授の序言つきで出版されたのは、同じ1962年の出来事であった。にもかかわらず、ルビンシュテインは、米国では全く知られていなかった。米国とソビエトは社会全体として相互に余りにも遠く、日本には、親米と親ソの異なる二つの部分的下位社会において、それぞれが両国のそれぞれに近かった。そして、日本での「常識」は、米国に比べれば、その意味で多種多様であった、と私は思う。その後は、ロシアと米国の接近により、米国でも、ルビンシュテインは別としても、ヴィゴツキーやルリヤの諸著作とその研究書が、続々と出版されていることは、周知の通りである。異なる「偏見」が、社会間の交流によって、許容され、共有されるようになったのである。社会の「偏見」は、言うまでも無く、以上で尽きるような単純なことではない。来日したある著名な米国研究者G氏がその芸術心理学の研究を発表した際に、私が彼の著作を通じて知る彼の基本的立場とはどこか違和感を感じさせる研究方法を用いて、その研究をしているように感じたので、そこに感じた違和感を指摘したところ、彼は残念そうにこう答えた「財団から研究資金を引き出すため

にはこのように研究しなくてはならないのだ」と。財団は、資金援助を提供する研究の審査を、権威ある研究者に委託する。資金補助を求めて応募する場合、審査を通るような研究にしないといけない。研究者もそうした社会の厳しい条件下で生きているのだ、ということだった。

ソビエト時代のソ連心理学者は、西欧の「観念論」哲学者、たとえば、フッサール、ハイデガー、サルトル、メルロポンティなどを読む事までは許されても、公に引用する場合には、厳しく批判するという仕方ではしか引用が出来なかった。そして、マルクス・エンゲルス・レーニン・スターリンを論文の冒頭で称揚することが求められた。時代が変われば、その同じ社会でも、そのリストから、スターリンが脱落した。まさに、M.クンデラの『存在の耐えられない軽さ』を思わせる。そして、また…。社会の「偏見」は、単純ではない。そして、研究者は、まさにそうした社会の「偏見」の中で生きているのである。

3) 文化の偏見:「文化の偏見」という時、思い出すことが二つ在る。心身二元論を採る場合でも、では、行動と心理とどちらを重視するか、というところに、文化の違いが現れて、それが、心理学の研究方法の選択にも、姿を現すということである。心理と行動は単純には一致しない。一致するなら、心理学への必要度は少なくとも激減するだろう。「言行一致」あるいは、「不言実行」などの言葉は、言行一致が困難であればこそ、唱えられるのであろう。そこで、たとえば、行動を透して心を知ろうとする心理学を求めるのか、心は問わず、行動のみの規則性と法則性を知る科学を求めるのか、大きく道が分かれることになる。精神科学または心理科学を求めるのか、米国発祥の「行動科学」を求めるのか、という違いとなっても現れる。前者が、第二次大戦前のドイツで、現象学の影響下（Spiegelberg, H. 1972, 67-83）、ゲシュタルト心理学として結実したのに、後者が、パブロフの条件反射学の影響下で、実利的なアメリカで行動主義心理学として結実したことには、それぞれの文化のその時代の「偏見」がある、と私は考える。唯物論心理学として、ソヴィエトのルビンシュティン著『存在と意識』、『一般心理学の基礎』に初めて接したとき、そこに、真正面から、心理の問題が扱われていることに、私は驚嘆したものだ。若く無知だった私は、「唯物論」という名に惑わされて、パブロフ流の「条件反射学」や「高次神経活動の生理学」を基礎とした心理学を予期していたからだった。ところが、そうしたソヴィエトらしい生理学的心理学とともに、たとえば、文学者トルストイ、ドストエフスキー、プーシキン、音楽家リムスキーコルサコフなどの芸術活動を詳しく論じる心理学が展開されていて、私の理解する「唯物論」とは全く異なる姿がそこには示されていたからだった。後に、ルリヤの仕事にも、同じ驚きを覚えた。さて、その当時、私は、「科学観」に無知なまま、数量化、心理測定、推測統計学、多変量解析、因子分析、潜在構造分析、などなどの「鑑」で身を固めていた。また、私は、唯物論と観念論の関係について、当時の通説俗説に惑わされていた無知な若者であった。そ

うした私には、ワトソンの行動主義はもちろん、媒介過程説の新行動主義などのアメリカ心理学にしても、ルビンシュティンに較べて、ずっと「唯物論」的ではないかなどと、大いに混乱を来たしたものだ。2006年現在の私は、むしろそこに、社会と文化の違いを強く感じるのである。

私は、1988年に、親しい友人たちとモスクワを訪問し、第2回日ソ教育学シンポジウムに参加した。その際、会議とは別の偶然の事情で、同じホテルに宿泊中の、米ソの道德教育を比較研究している一人の米国人教育学研究者と出会った。彼の米ソの子ども達の教育についての感想が私にはたいへん興味深かった。それは、米国の子ども達に比べて、当時のソ連の小学校段階の子ども達の読書力と、その文学的素養が桁外れに広く深いことに、ただただ感嘆した、というものであった。そして、対応する米国の教育の貧しさを慨嘆していたことが印象的であった。トルストイとドストエフスキーを民族的古典とするお国柄である。モスクワ市内で、たまたま乗り合わせ、トルストイ文学館へと案内してもらったタクシーの運転手さんの愛読書が、トルストイの『戦争と平和』だと聞かされて、私は驚いた。さきの米国人の言を借りるまでも無く、米国では、そのような情況は、私の滞米5年間の経験でも、非常に考えにくい。もちろん、それぞれの職業の置かれた社会経済的状況も多種多様で、一概には言えないことは当然だ。が、行動主義が米国心理学会を席卷したのも、そうした比較的皮相な文化的背景によることも直観されたのである。そして、ソヴィエトの弁証法的唯物論心理学に、文学や芸術の心理学が入るのはむしろ当然だったのかもしれない、と改めて思ったものだった。

翻って、今日の日本の文化的状況を考えると、どのような心理学とそれに伴う偏見が流行し、また将来流行して行くのだろうか。心理学を基礎づけている哲学に対する無知から来る偏見に基づき、「科学的心理学」を僭称することにより、あたかも永遠に普遍妥当する「客観的」心理学であるかのように提示される浅薄皮相な心理学が、広く社会で受け入れられる情況が戦後の日本にはあるのではないか。そこに、もう一つの文化による「偏見」を思わずには居られない。これもまた、言うまでも無く、私個人の「偏見」である。

4) 学派の偏見: 学派による偏見については、ここで改めて多くを語る必要を認めない。偏見あればこそ、学派なのであるから。ただ、次のことは指摘しておきたい。それは、ある個人がある特定の学派に属するということには、実に多種多様な動機と経緯と在り方がある、ということである。それは、その個人の生涯の脈絡からすれば運命的なものである、とさえ言える。その個人の自由意志と決断によって特定の学派に属することになるという場合も決して無いとは言えないであろう。が、しかし、多くの場合、偶然と運命の悪戯とも言うべきものによって、気がついてみると、その学派に属していることになり、そのまま属し続け、生き続けることに成る、という場合が極めて多い、と私は考えている。その結果が、繰り返

すが、心理学における流行による学派の激しい盛衰なのである。

戦前日本の心理学がドイツ心理学、ことにゲシュタルト心理学が支配的であったのに、戦後日本の心理学では、アメリカ心理学、ことに、研究方法としては、統計的手法の活用無しには研究ではないかのように見なす雰囲気が支配的となった。これは、第二次大戦のドイツと日本の敗戦、米英の戦勝、米国を中心とする戦勝連合軍による日本占領、という社会的事情によるもので、学問研究上の学派間の争いの勝敗などによるものではない、という事情は、改めて確認し、しっかりと記憶に留めておきたい。戦後、米国からドイツに客員教授として招かれた、私の恩師、発達・教育心理学者のD. P. Ausubel教授は、ドイツ人心理学者の書棚に収められていたのが、大部分、アメリカ心理学書であることに驚いた、と語っておられたことを思い出す。1975年頃のことであった。ちなみに、1964年のAusubel教授の大学院演習のテキストには、Vygotskyの著作(1962)が含まれていた。さて、心理学の学派の盛衰も、ドイツのゲシュタルト心理学派が、ナチスのユダヤ人狩りによって壊滅したことにも見られるように、学派間の学問研究上の論争などによるとは限らず、極めて社会的および政治的な事情によっても起こることなのだ、ということも銘記しておきたい。

もう一つ、それぞれの心理学学派の大きな背景には、それぞれを支える巨大な哲学が控えていた。このことに漠然と気づいたのは、思えば、1960年のことだった。英米の心理学の背景には論理実証主義が、ソヴィエト心理学の背景には弁証法的唯物論が、そして、後になって知ることになる人間科学的心理学の背景には現象学が、それぞれに控えている。そしてそれらは、それぞれに、「心とは何か」、「世界とは何か」、「客観的とは何か」、「科学的とはどういうことか」、「在るとは何か」、「知るとは何か」、「研究とは何か」などについての思想の支えとなっているのだった。大学での心理学教育においては等閑視されている、認識論、存在論、科学論への無知から、当初、そのことが私には全く見えていなかったのだ。現象学と弁証法的唯物論の間の対話が試みられている。分析哲学と現象学の間にも対話がある。しかし、哲学に統合化は果たしてありうるか。心理学諸学派の偏見の克服にいたる道は、心理学の具体的な諸方法の共有と相互交流によって、生まれて来るのかもしれない。その道は、小さな存在にすぎない私のもがきによって、簡単に見出せるような事柄ではない。しかし、私は、いま、Husserl現象学に、その統一化に至る道が見いだせると望み信じるに到っている。竹田青嗣(2004, 87)は、「深刻な世界観の対立、信念の対立が生じたとき、これを克服する本質的な原理として」現象学は構想された、と説いている。現象学の「根本動機」は、信念形成あるいは確信成立の条件と意味と構造を解明し、偏見克服と相互理解を促す学であろうとする希求だからである。

5) 集団の偏見: 心理学者の「偏見」が、研究方法にかかわる偏見に限らず、所属集団において、集団により形成され維持されるものだ、ということも、忘れてはならない。人間個人

というものは、畢竟、弱いものであって、「片目の猿の集団」に属する「両目の見える孤独な猿」は、自ら片目を潰してまでして、集団帰属を確保せざるを得ないのである。たとえば、米国で、心理学の博士論文テーマと研究方法をどのようにして決定したのかを面接調査した現象心理学的研究があったが、予想される通り、多くの場合には、自らの意思に反してでも、指導教授の意向に合わせて、決定がなされていたということであった。そして、その決定が、その後の一生の研究方向を定めることもまた、しばしばなのである。それは、師としての指導教授の指導に従うという意味だけでなく、その後の兄弟弟子たちから成る集団への帰属が、それによって確保されるということもあり、「一匹狼」を好む余程の変わり者は別として、心理学の世界で、有力な集団に帰属し、それが次第に学派を形成するに到れば、研究方法上の偏見もまた、明示化され、一層強固になって行く、という経緯と事情は、それぞれ自明の理であろう。たとえば、Jerome S. Bruner教授の研究室には、多くの院生たちが集っていた。後に、共同研究者として名を連ねることになった方々である。そして、彼らは、当然のこと、共通の「偏見」を共有していたのである。これは、もちろん、大きく言えば、社会と文化の「偏見」の問題であるが、しかし、より直接的には、研究者の卵たちが、著名な指導教授に率いられる求心力の強い所属集団の「偏見」の問題なのである。ちなみに、私が客員研究員として、一年間を過ごした、米国Pittsburgh市のDuquesne大学には、1980年の秋、現象学的心理学を学ぶことを求めて米国全土から集まった新しい修士課程入学の院生たちのそれぞれが自らの所属集団から脱して、Duquesneにやって来た経緯を、互いに熱狂的に語っていた。語られていたのは、かつての所属集団の圧力から逃れ、場合によっては自らに保証された前途を犠牲にしてまでして、自ら学ぶことを自由に自発的に選んで、無名の大学Duquesneの心理学部に学ぶことを決断して選んだことの喜びとその興奮であった。逆に言えば、そのような自由と自発性は、通常は極めて実現しにくいということが、そこに暗に意味されていたのである。私も、喜びに満ちた1年をそこで過ごした。その縁が、私の人間科学研究国際会議（International Human Science Research Conference）との今日における繋がりに生きている。たとえば、Amedeo Giorgi, Bernd Jager, Steen Halling, Mike Aron, Bep Mook, Dryer Krugerなどなどの諸氏との長年に渡る親密な交流も、別の言い方をすれば、私自身の彼らの精神的集団への帰属感の表れである、とも言えるであろう。今日の世界では、集団は、旧来の地縁、血縁、職場縁、学閥などによるものだけには、決して限定されない。たとえば、インターネットとメールを通じて、世界中の人々と精神的な繋がりを持ち、新しい意味での精神的集団を形成し、その集団の「偏見」を共有するということが、また可能になったのである。

6) 個人の偏見: 個人は「偏見」の塊である。人間の一生は、幼稚かつ未熟で偏狭で浅薄な一面的偏見から出発して、次第に、より一層成熟した宏遠で深厚な多面的偏見へと移行して

行く過程でもある、と考えることも出来る。多種多様な心理学の統合化ということには、具体的には、個々の心理学研究者の偏見が、そのように未熟で一面的な偏見から、成熟した多面的な偏見へと成長し続けることが、要請される。この脈絡で言えば、心理学の研究方法に関して、哲学者ガダマーがいう「教養」(Bildung)を、形成して行くことが要請されている、と言ってよいであろう。教養とは、他者に対して、また、自分の視点とは異なる、他人ならもつかもしれぬと想定される、より普遍的な視点に対して開かれていること、言い換えれば、世界と自分を他人の目で見ることができることである、とガダマーは捉えている(ガダマー、1986, 23-24)。個人としては、全知全能の神ならぬ身、偏見に囚われることは避けられない。しかし、たとえば、先の「思い出」におけるD教授は、自らの信念として、つまり、偏見として、「内観は信頼がおけず、今日の現代心理学では用いられていないこと、内観は時代遅れであること、被験者の説明で思考過程がわかる位なら、厳密で複雑な実験は要らなくなるだろう、被験者の報告を聞かないで、彼が考えていたことが明らかになるところが、この思考過程研究の素晴らしいところなのだ。」と断定的に語り、“Laut Denken”の可能性を否定し去った時に、その時点でのD教授は、今日の心理学の立場から見れば、やはり、未熟で偏狭かつ皮相な偏見を抱いていた、と考えざるを得ない。それは、その時代・社会・文化・学派・集団そして個人の(つまり、PSCの)偏見を、集約していたとも言える。ルビンシュティンの言うとおりの、「自己観察の可能性という問題は立ててはいけないのである。従って問題となることができるのは、自己観察を如何にして正確に解釈するかということ、およびこれに関連して、それは心理学的研究で[いかに]利用できるか、或いはより正しくいうと、心理学的認識に客観的科学的性格を保存しつつそれを利用するにはどうするか、という点である」(1961, 223-224)。この意味では、思い返して見ると、D教授は、自己観察と「一定の欠陥がある自己観察」としての「内観」(同前)とを同一視していた、とも考えられる。とするならば、その時点での視野の狭さを批判されても仕方がない。さらにまた、“Thinking aloud”法に関して、近年の電子機器の発達により、録音記録はもちろんのこと、イヤホンにより音楽を流し外界の音を遮断するなど、新しい工夫がなされるようになった(例えば、Aanstoos, 1985)。しかも、そのような新たな工夫は、自己観察の絶対的かつ全面的否定という強い偏見からは生じえないということは、明らかであろう。ここで、私が、「多種多様な心理学の統合化のための偏見の克服」を言うとき、別言するならば、「PSCの偏見の克服」、より具体的に焦点化するならば、「心理学研究者の偏見の克服」ということであり、それは、心理学研究者の「教養」の豊饒化への要請、ということにもなるであろう。

「思い出」のJ. S. Bruner教授には、1978年York New州Ithaca市から、Cambridgeの憧れのハーバード大学William James Hallの研究室に訪ねて行った経験があり、若き日へのある懐かしさと親しみを感じる。教授は、その後、ヴィゴツキーの仕事にも、ルリアの仕事にも、親し

んでいる。さらに、たとえば、『可能世界の心理』（1998年）のような著書を著してもいる。もし仮に、現在の教授に、「思い出」当時のD教授の言葉について、意見を求めたら、どのように答えるだろうか。明らかなことは、個人はその生涯を通して成長し変化し、成長各時期の「偏見」を次々に克服して行くものだ、ということである。

被験者の言語報告について言えば、極端な不信も、極端な盲信も、共に採るべきではないであろう。可能な限りの慎重さをもって、厳しい問いによる吟味を常に重ねながら、しかし、人間に対する、また、他者に対する基本的な信頼をもって、研究は行なわれるべきであろう。それなくして、研究者自身の言葉による報告に対してのみに、信を、読者たる他者に求めることが果たしてできようか。自らの言葉には信を強く求めながら、他者の言葉には信を絶対的に拒むとは何事ぞ。矛盾も極まれり。不遜も極まれり。無反省も極まれり。無知も極まるではないか。そうした個人の偏見を克服する一つの道としては、研究者個人が、ある研究方法を採る場合、「研究する側」に立つだけでなく、その方法によって「研究される側」にも立ってみる経験をするのが強く要請される。二つの側の分離と分裂こそが、「被験者」の言語報告への不信の根底にあるからである。例えば、性格についての研究をある研究者が性格テストを用いて、行うとする。ならば、彼は、まず、その性格テストを自らも受けるべきなのである。そして、その結果の解釈を、あたかも一人の被験者のテスト結果について為すかのように行う。そして、研究結果は、そのようなテスト結果と解釈の下される被験者の一人である研究者によるものであることを、公に示すべきであろう。また、「知能テスト」についても同様である。例えば、私は、凡人が天才を研究することに疑問を持つという「偏見」を有している。「われわれは、ひっきょう自分の背だけに合わせてしか他人を判断できない」（波多野完治先生の言葉）のであるから。日常生活における他者理解について、そのことを確信している。そこで、自分の背丈を示してから、他人についての判断を示すことで、その「他人についての判断」の理解を他人に委ねることが出来るようにすべきではないか。例えば、「幼児による他者判断」と、「フロイトによる他者判断」を、果たして同列に置けるだろうか。また、「幼児によるフロイト判断」と「フロイトによる幼児判断」はどうか。しかし、それは「幼児による他者判断」に価値が無いということは意味しない。しかしまた、「幼児による他者判断」であることを知らせた上で、その他者判断を知らせる必要があるのだ。どのような研究者による研究か、ということは、その研究自体を正確に理解する上で、極めて決定的な情報であろう。

研究者と被験者の間の不信を超えた先には、「共同研究者としての被験者」（キーン、E. 1989, 102-108）という思想が現れる。その詳論は、ここでは、割愛する。

ここで、このペースで、残る31項目について納得の行くまで論じようとするならば、許さ

れる紙幅では、到底論じきれないことが明白となって来た。そこで、ここでは、各項目についての詳述を、新聞紙上の「川柳短評」の趣の短評によって代えることにした。そして、それぞれについてのさらなる省察の展開は、読者諸氏に委ねることにしたい。

- 7) 可能性への偏見:「経験の地平構造」の理解によって、可能性を洞察し克服を。
- 8) 偏見による社会的禁忌(タブー):「タブー」をタブーにすることで「教養」を。
- 9) PSCの無自覚: 偏見はそれと自覚されたとき克服される。それは、PSCに共通である。偏見のPSCによる相対性が明らかになることで開かれる展望は、ボルノー(1983, 38-39)が、「徳」の多様性と「歴史的相対性」(言い換えれば、歴史時代による相対性)を明らかにしたことによって開かれる展望と同型的であり、その述べるところが示唆的である。すなわち、「肝要なのは、可能性の豊かさを発展させるということであり」、そのことにより、「多様な可能性を精神的なまなごしの前に展開し」、「まなごしを広げ、意識を鋭く」し、「責任を呼び醒まし」、「真に自由な決断」を可能にする。PSCによる「偏見」の相対性の確信は、自覚化を促し、タブーから解放し、眼差しを広げ、意識を鋭くし、「教養」を豊かにし、責任を呼び醒まし、研究上の真に自由な決断を可能にする。
- 10) 他のPSCの偏見認知:「人の振り見て、我が振り直せ」も、PSCに共通。
- 11) PSC変化による自覚の発生: 顧みて自らの未熟さに気づくは、人の常。PSCも。
- 12) 偏見自覚後の克服肯定: より広い視野に立ったとき、前の視点の偏狭さに気づく。
- 13) 偏見自覚前の無自覚: 偏見である可能性にさえ気づかないのが克服困難な偏見。
- 14) 偏見の無尽性: 経験の地平構造。偏見の克服の後にはまた偏見。無限の偏見が。
- 15) PSC変化による偏見克服可能性: 自覚的意識的にPSCを変化させることで克服。
- 16) PSC変化の困難性: 現実に困難なPSCの変化は、人間の特技である創造的想像で。
- 17) 偏見と方法採用の相対的独立の可能性: 偏見と独立に方法を加えたら開ける道。
- 18) 方法独立採用への否定的評価: 新しい発見は間違いや失敗から生まれることも。
- 19) PSC変化による方法採用の評価逆転: 歴史が教える逆転の可能性。PSC共通。
- 20) PSC変化による偏見変化と方法評価逆転の可能性: 偏見の変化は逆転を招く。
- 21) PSC偏見独立方法採用の耐久性: 無駄がPSC変化により無駄でなくなる。
- 22) 偏見独立採用の一時的否定性: PSC変化以前、無駄は無駄。無駄無用を貴ぶ。
- 23) 偏見からの独立の全体的安定性: 次々に有用と発見される無用と無駄の可能性。
- 24) 偏見からの独立による心理学統合化の可能性の発生: 偏見克服独立、相互理解。
- 25) 共通方法採用による比較とPSC間他者理解: 共通方法採用が相互理解への道。
- 26) 歴史時代間の他者理解: 歴史時代の理解は、後世の一方的理解を超えられるか。
- 27) 異社会間相互理解: 冷戦下の米ソの相互理解は、異社会間相互理解の典型か。
- 28) 異文化間相互理解: 自然科学と人間科学の相互理解は、内容と方法を通して。

- 29) 異学派間相互理解: 学派間相互理解の障害は、実は、社会・経済・政治的でも。
 30) 異集団間相互理解: 争いの後に、相手も同じ人間だったと初めて覚る愚かしさ。
 31) 個人間相互理解: 心理学史、研究方法、研究内容についての「教養」への渴望。
 32) 偏見の克服とPSC相互理解の深化発展の道: ささやかな相互乗り入れの意味。
 33) 信念と偏見の相互転化可能性へ心の解放: 他者偏見の自己信念化体験の貴重さ。
 34) 「偏見」信念固執の代償の危険性: PSC変化への対応の欠如、頑迷固陋の代償。
 35) 無駄、無益、失敗、滅亡した諸方法の知の重要性: 不成功に学ぶ知の柔軟さ。
 36) 心理学の人称性の自覚は、偏見克服への道である。: 人称性無理解から偏見が。
 37) 「偏見」克服は、心理学統合化への一つの道である。: 心理学研究者の「教養」の豊饒化が多種多様な心理学の現実性と可能性を享受させ、創造的想像力を活性化させる。

IV. 時間、他者、人間、空間の間の相互的な互換性・変容性・補完性の原理

<TOPSのETC原理>: PSCの各層への適用可能性を洞見して

さて、以上のように論じて来たからと言って、PSCの各層における「偏見」とその克服が、同一の問題であるなどと言っているわけではない。PSC、すなわち、「時代、社会、文化、学派、集団、個人」言い換えれば、“Period, Society, Culture, School, Collective, Person”のそれぞれにおける「偏見」の在り様が同一であるなどと言っているわけではない。相互の間の差異は、言うまでもない。それを認めないとすれば、それはあまりにも無知蒙昧、粗雑かつ乱暴な議論であろう。しかし、ヴィゴツキーも言っていたように、物事現象の間の差異を認めることよりも、同一あるいは類似を認めることのほうが実は困難なのだ。いや、ピアジェの引用するポアンカレの言うように、「不連続なものを連続に、連続なものを不連続にすること」、私の言葉でいえば、「同一に差異を認め、差異に同一を認めること」が科学的研究のエッセンスなのである。そこで、ここでは、極力、多種多様な心理学が混沌の中に併存する心理学の世界において、それらの心理学の統合化への道を見出すために、遍在する「偏見」の克服について、「差異の中の同一」を見るべく努め、PSCの間の同型性を指摘したのである。その成否は、読者一人ひとりの「偏見」によるご判断に委ねよう。

ここで、PSC各層に共通する原理として、真面目に、しかし、半ば戯れに、<TOPSのETC原理>なるものを簡潔に提唱して、本稿を終えたいと思う。

<TOPSのETC原理>とは、英語で表現すれば、こうなる。

The ETC Principle of TOPS (with respect to PSC's prejudices), すなわち, “*The Principle of Exchangeability, Transmutability, Complimentality of Time, Others, Person, Space: with respect to the prejudices of Period, Society, Culture, School, Collective, Person*”である。ここで、prejudicesは前述の通り、taken-for-grantedness, あるいは、self-evidences, とも言い換えられうる。

日本語で表現するとすれば、「時間、他者、自己（人格個人）、空間の間の相互的な互換性、変容性、相補性：時代、社会、文化、学派、集団、個人の『偏見（自明性）』に関して」とでもしておこうか。この原理を論証したり証明したりすることには、言うまでも無く、直ちには不可能に近いほどの膨大な探究が必要であろう。そもそも、時間、空間など、個々の概念のどれ一つを取り上げてみても、膨大な研究を要するであろう。まして、…。以上の原理について、簡単に、そのよう探究による論証や証明が出来るはずも無い。しかし、この原理の意味と構造は比較的簡単明瞭である。そして、それが明瞭化されるならば、その示唆するところは広範かつ深遠である。精密画にも、素描にも、それぞれに、採るところがある。言うまでも無く、ここに描かれる「TOPSのETC」は、最大限に粗い素描であるが、その存在理由は、十分にあると確信する。では、その意味するところの、簡単な説明を試みてみよう。個人のレベルで、その意味と構造を示すのが早道であろう。

ある個人(Person)の「偏見」(Prejudices)の発生、成立、変遷を思い描いてみる。個人なら、誰でも、それぞれの時点における「偏見」を抱いている。最初は、狭い浅い軽い「偏見」で、それは、偶然に支配されて形成されたもので、本人によって意識的に選び取られたものではない。その「偏見」は、次第に多種多様な仕方に変化していく。狭く浅く軽いままに留まる場合もある。本人が意識的に選んで、広く深く重くなって行く場合もある。そして、それぞれの個人において、多種多様な偏見の多種多様な変遷の軌跡が、その生涯を通じて、描かれることになる。その変遷における変化には、A) その個人の世界における内発的自発的变化もあれば(P)、B) 他者たちとの出会いによる他発的外発的变化もある(O)。また、C) その個人の生きる空間の変化による変化もあれば(S)、D) その生きる時間の変化による変化(T)もある。例えば、a) (P) その個人が自ら思索して、従前の偏見を克服して新しい偏見に移行する場合、b) (O) 特定の他者との出会いによって啓発され促されて起こる、世界の変化、それに伴い偏見を克服あるいは同化する場合、c) (S) その個人の占める空間、例えば、異なる文化あるいは学派への所属など、によって促されて、偏見が変化する場合、さらには、d) (T) その個人が、時間の流れに沿って、ある場合には時代状況の変化に伴って、個人としての偏見も変化する場合、などが考えられる。

そこで、偏見の多様性と統一性という観点から考えてみると、ある個人の視点から眺めた場合、A) (P) 個人内の変化による多種多様性。その個人の生涯における偏見の変遷の軌跡に現れている偏見の多様性と、その個人の自己同一性による、多様な偏見の統一性、ということが考えられる。B) (O) 他者による多種多様性。その個人がその生涯において、時間の流れに沿った、あるいは、ある時点においてその世界に点在して現前する、直接および間接に出会った他者たちの「偏見」の多種多様性が考えられる。これは、原理的には、その個人の生涯の時間の流れにおいて出会ったという一点においてのみ統一性が見られるので、それ

らの諸偏見に統一性が存在するという予めの保証はどこにもない。C) (T) 時間による多種多様性。その個人の世界に現れる、生涯の時間の流れ、そして、人類史の時間の流れのなかで出現した「偏見」の多種多様性が考えられる。例えば、一人一人の偏見の多様性について言えば、心理学史の詳細に理論的に通じている研究者にとっての「研究方法についての偏見」の多種多様性は、属する一時代の偏見に閉じ込められている研究者にとっての多種多様性に較べて、恐らく、内容豊かであろう。D) (S) 空間による多種多様性。例えば、諸外国の現代心理学研究に広く深く通じている研究者にとっての偏見が寛容に許容する多様性は、孤立した一国の一地方の一大学の心理学を知るだけの視野の狭い研究者の偏見が偏狭に固執する多様性と較べて、より一層多彩で豊かであろう。

以上は、個人の偏見の多種多様性とその統一性の粗い素描である。

では、TOPSの相互間におけるETCとは何か。上に展開したPersonの場合に即して言えば、特定の個人Pにおいて、心理学の研究法に関する見解として——それぞれの方法についての「偏見」として、また、そうした諸偏見のある組織性をもつ集合として、——現在の時点で、ある「多様性と統一性（多様性の欠如あるいは統一性の欠如を含めて）」が見られるとする。その「多様性と統一性」は、Pが出会う、あるいは、出会うる、無数の他者たち(Os)の間に見られうる「多様性と統一性」と、ETCである。つまり、交換可能、変換可能で相補的である。同様に、それは、時間の流れの中で、歴史の流れのなかで、出現しうる「多様性と統一性」とETCであり、さらに、空間の中で、多種多様な立場と位置により出現しうる「多様性と統一性」とETCである。以上が、TOPSの相互間におけるETCの、PSCのうちの、Person（個人）に関する部分である。

同様に、PSC (*Period, Society, Culture, School, Collective, Person*) のいずれについても、TOPS (*Time, Others, Person, Space*) の相互間で、ETC (*Exchangeability, Transmutability, Complementality*) が成立する、というのが、ここで言う、“*The ETC Principle of TOPS*”である。何とも粗雑で大雑把な原理である。が、これは、PSC間に成立する準同型的(Homomorphic)な原理なのである。これが一旦承認され納得されると、多種多様な場での相互関係が内容豊かに、しかし、透明に見えるようになるから不思議である。そして、その一貫性と普遍性が、感得されるのである。

この原理についてさらに詳細に展開することは、ここでは到底無理である。が、それにもかかわらず、とりあえず、この準同型性の原理を、ここにこのような形で提出できたことを、私の喜びとする。Person（個人）にとってのOs（他者）の意味が時間体験とETCであることを述べた、ある現象学者による「他者は襲い来る未来である」という言葉に出会ったときの、過去における私自身の驚きを、いま思い返している。そして、「親しい他者は、既に馴染みとなった過去である。」という言葉、そして、「にも関わらず、他者は、やはり未来とし

て襲いかかる」という言葉の成立の可能性とその意味を考えつつ、PにとってのOs（他者たち）とT（時間）とのETCについて、いま改めて思う。

おわりに

本稿は、前述の「思い出」の意味と構造の解明を出発点として、心理学の研究方法についての「偏見」の運命の変遷をPSCに関して指摘し、翻って、今日の「偏見」を相対化し、そのことにより、研究方法についての「偏見」による研究方法の偏重と軽視あるいは無視を正すことを通しての、多種多様な心理学の統合化への道について、一つの提案を展開する予定であった。たとえば、その事例として、「内観法」、「言語報告」、「面接法」など、行動主義全盛時代には極めて不評で、軽視あるいは無視され、否定的にしか評価されなかった諸方法が、米国でこの10年ほどの間に起こった「意識ブーム」(Sahavi, 2005, 3)の影響下、また、今日の心理学研究における質的研究法の勃興と隆盛により、再び重視されるに到っていることについても、なお検討すべき余地があることを明らかにしたかった。実験法に関しても、同様である。例えば、スレーター(2005/2004)は、その視点からも、興味深い。それと共に、一般的に言って、あるPSCにおいては軽視あるいは無視され、否定的に評価されている諸方法についても、異なるPSCの視点からの再評価を試みることによって、新しい積極的な評価の再発見が起る可能性があることの指摘を企図していた。たとえば、Fischer(1994)の質的方法と量的方法の相補的な併用の意味の検討などである。ところが、「偏見」をめぐる省察を進めるうちに、当初の企図の実現に到らぬまま、何時の間にか、紙幅を越える結果となった。しかし、読み返して、この時点で、これはこれで読んでいただく意味があることを自ら認め、「省察」であることを積極的に生かし、この「省察」をここで閉じることにする。

心理学の捉えた「人間の心」には、捉えられる「人間の心」を彩る偏見と同時に、捉える「人間の心」の偏見が、共に入り組んだ仕方では表現されている。言うまでも無く、この事情は他の諸学問においても成立する。が、しかし、心理学において、ことに顕著である。それは、「人間の心」によって「人間の心」を捉えるのが心理学だからである。研究主体の意識、自己意識、自己覚知の問題の解明(Sahavi, 2005)が必須の課題となる。

私に生命ある限り、さらなる省察に誘われていることを、いま、強く感じている。

文 献

- Aanstoos, Christopher M. (1985) The Structure of Thinking in Chess. In Giorgi, Amedeo ed. *Phenomenology and Psychological Research*. Duquesne University Press. 86-117
- Ashby, W. Ross, (1954) *Design for Brain*. Wiley
- ブラッケンブルグ, Blankenburg, W. (1978) 『自明性の喪失: 分裂病の現象学』, 木村敏・岡本進・島弘嗣訳 みすず書房

- ボルノー, Bollnow, O. F. (1983/1958) 『徳の現象学: 徳の本質と変遷』 森田孝訳, 白水社
- Bruner, J. S. Jacqueline J. Goodnow, George A. Austin (1962) *A Study of Thinking*, Science Editions.
- ジェローム・ブルーナー著 (1998), 田中一彦訳 『可能世界の心理』 みすず書房
- Duncker, Karl (1935/1952) *Zur Psychologie des produktiven Denkens*, Verlag von Julius Springer. 小宮山栄一訳, 『問題解決の心理: 思考の実験的研究』 金子書房
- Fischer, Constance T. (1994), *Individualizing Psychological Assessment* Laurence Erlbaum
- ガダマー, H. G. (1986) 嚮田収他訳 『真理と方法 I』 法政大学出版局
- キーン, E. (1989) 吉田章宏・宮崎清孝訳 『現象学的心理学』 東京大学出版会
- O'Connor, N., ed. (1961) *Recent Soviet Psychology*, Pergamon Press
- ルビンシュテイン, S. L., (1962) 石田幸平訳 『思考心理学: その研究方法』 明治図書
- ルビンシュテイン, S. L., (1961/1970) 内藤耕次郎/木村正一訳 『心理学: 原理と歴史』 上下, 青木書店
- Sahavi, Dan, (2005) *Subjectivity and Selfhood: Investigating the First-Person Perspective*. The MIT Press
- Schutz, Alfred & T. Luckmann (1973) *The Structures of the Life-World I*, Northwestern UP
- Simon, Brian, ed. (1957) *Psychology in the Soviet Union*, RKP
- スレーター, ローレン著 (2005/2004), 岩坂彰訳, 『心は実験できるか: 20世紀心理学実験物語』 紀伊国屋書店
- Spiegelberg, H. (1972) *Phenomenology in Psychology and Psychiatry*, Northwestern UP.
- 竹田青嗣著 (2004) 『現象学は<思考の原理>である』 ちくま新書
- Weinsheimer, Joel C. (1985) *Gadamer's Hermeneutics: A Reading of Truth and Method*. Yale University Press
- ヴェイゴツキー (1962), 柴田義松訳 『思考と言語』 上下, 明治図書
- Vygotsky, L. S., (1962), Edited and translated by Eugenia Hanfmann and Gertrude Vakaer. *Thought and Language*, MIT Press
- 吉田章宏 (1991) 「多様化を通しての個性化: ひとつの視点」, 川野辺敏編 『教育のペレストロイカ: 教育における個別化と個性化をめぐる』, 新読書社, 9-35
- 吉田章宏 (2002) 「心理学研究方法論をめぐる省察: 心理学の人称性: 我, 汝, 誰彼の心理学」 淑徳大学大学院研究紀要 第9号 43-56
- 吉田章宏 (2003a) 「心理学研究方法論をめぐる省察: 心理学の多種多様性について」 淑徳大学社会学部研究紀要 第37号 149-165
- 吉田章宏 (2003b) 「心理学研究方法論をめぐる省察: 三心理学の不連続化と連続化の道」 淑徳大学大学院研究紀要 第10号 1-17
- 吉田章宏 (2004) 「心理学研究方法論をめぐる省察: 多種多様な心理学の統合の可能性」 淑徳大学社会学部研究紀要 第38号 219-240
- 吉田章宏 (2005) 「心理学研究方法論をめぐる省察: 多種多様な心理学の統合は何故必要か」 淑徳大学社会学部研究紀要 第39号 76-95
- 吉田章宏 (2006) 「心理学研究方法論をめぐる省察: 三心理学の原形式化の再検討, 統合化への『理論的構造』」 淑徳大学総合福祉学部研究紀要 第40号 39-86

A Meditation on the Research Methodology in Psychology:

A way to overcome the prejudices on research methods
for the purpose of integrating diverse psychologies

Akihiro YOSHIDA, Ph. D.

This article attempts to explore and propose a possible way for integrating diverse psychologies, by means of explicating the nature of “prejudices” on the research methods in psychological researches. An episode of an incident is presented, that was experienced by the author, back in 1964, where a naïve graduate student asked why J. S. Bruner, in his “*A Study of Thinking*” did not ask his experimental subjects the simple question: What have you been thinking during the concept formation/acquisition/attainment processes. Today, after more than 40 years since that time, few people would hesitate to ask the experimental subjects the same question, while having been liberated from the taboo under the influence of then dominant behaviorism and neo-behaviorism and now being encouraged by the venturesome cognitive psychology and the Zeitgeist of “consciousness boom”. The historical, social and cultural change of the prejudices on the psychological research methods is evident. The prejudices here may alternatively be called as “taken-for-grantedness” or naturally accepted “self-evidences”. A variety of such prejudices were explicated, i.e., prejudices on the research methods of historical periods, societies, cultures, schools, collectives and/or individual persons. The possible transformations of the prejudices are considered, along with a few concrete examples. After the explication of the prejudices, *The ETC Principle of TOPS (with respect to PSC’s prejudices)* is formulated and proposed. It is “*The Principle of Exchangeability, Transmutability, Complimentality of Time, Others, Person, Space: with respect to the prejudices of Period, Society, Culture, School, Collective and Person (PSC)*”. Some positive implications of the Principle for the purpose of integrating diverse psychologies have been explicated.